≪現地報告≫

三重県多気町の伊勢芋栽培

谷　山　鉄　郎*

わが国のツクネイモの栽培面積はおよそ1,500*ha*におよび，近年，贈答品としての需要の伸びによって，栽培面積は徐々に増大している。ツクネイモ栽培の大部分は本州を中心に広く分布し，なかでも，伊勢芋，丹波ヤマノイモ，大和芋はよく知られている。伊勢芋は三重県多気郡多気町の特産として300年以上の栽培の歴史をもち，その栽培技術は高い水準にある。経験的に生まれた技術が伝統的に受け継がれてきたとはいえ，連作障害を水稲作との輪作で回避し，湿害・乾燥害にも抵抗力を示すこの栽培法は，気候風土に適応した技術として高く評価されるものである。

1.伊勢芋の植物学的位置

ヤマノイモ科（Dioscoreae）には10属あり，ヤマノイモ属（*Dioscorea* spp.）は，そのうち最も大きい属で，世界に600種以上あるといわれている。川上〔1968〕によると，植物界で*Dioscorea*属は1属中で食用とされている種の数が最多で，これら食用種を一括してヤムイモ（Yams）と呼んでいる。ヤムイモは熱帯や亜熱帯に広く分布し，ブラジルや中南米には最も多く150種程度が，メキシコには63種があるといわれている。また，アジアやアフリカでも栽培され，わが国はアジアにおける栽培の北限とされている。

わが国でもヤマノイモは古くから食用や薬用として用いられてきた。川上〔1968〕によると，わが国に自生するものや，栽培されているものは，大きくトコロ群，ヤマノイモ群およびカシューイモ群の3群に分けられ，トコロ群には自生のもの10種が含まれ，ヤマノイモ群にはヤマノイモとナガイモの2種，カシューイモ群にはニガカシュー1種が含まれている。

『最新園芸大事典』〔1970〕は，ヤマノイモ群を野生型のヤマノイモ（*D. japonica* THUNB.）と栽培型のナガイモ（*D. opposita* THUNB.）に分け，

*たにやま　てつろう，三重大学農学部

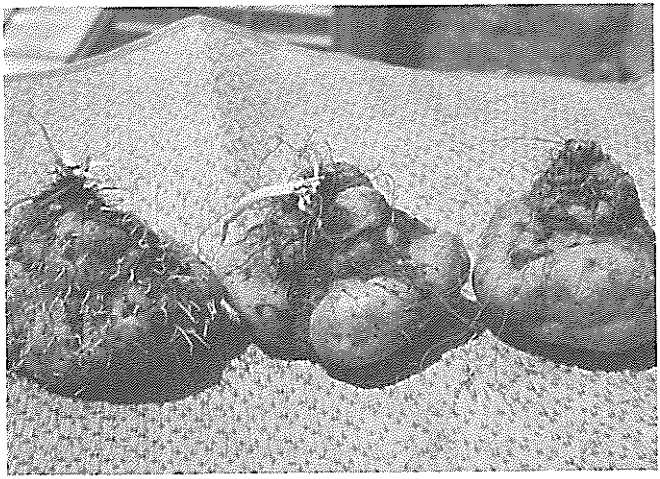

図1　種いもとして用いられる伊勢芋
1個300g程度のものが3～4
つ切りにされる。

ナガイモはさらにそのイモの形によって，長形のものをナガイモ，塊形のものをツクネイモ，扁平型のものをイチョウイモに分けている。そして，ツクネイモは，形，色，産地等によって，丹波ヤマノイモ，伊勢芋（図1），大和芋等に細分されている。『新編食用作物』〔1980〕では伊勢芋を *D. alata* L.（ダイジョ）とし，あるいは『農学大事典』〔1977〕では *D. japonica* とする説もあるが，葉が対生していることや蔓やイモの形等から判断して，*D. opposita* と統一するのが妥当であると考えられる。

2.伊勢芋の伝統的栽培法

(1)田畑輪換と高畝栽培

伊勢芋がなぜ多気町の特産になったのかは明確ではない。旧津田村（現在の多気町）の当時は，溜池の水だけで水稲が栽培されていたが，全水田に水稲を栽培すると水不足になるため，伊勢芋の作付けによって水稲作付面積を縮小し，水不足を解消して安定的な米作りがなされたと伝えられている。現在でも，溜池の水は利用されている。また，伊勢芋の栽培当初は山間の開拓地を利用していたが，連作障害が著しく，そのため田畑輪換が古くから行われ定着したといわれている。一度栽培した畑では3～4年間は栽培できず，一般的には，1年目水稲，2年目水稲，3年目に伊勢芋のごとく，3年輪作体系が古くから行われてきた。

1960年あたりまでは，水田裏作としての麦作の間作として植付けられ，麦の刈取りのころには伊勢芋の蔓は20～30cmにも伸長し，麦藁を高畝一面に敷く方法がとられてきた。しかし，MSA小麦の輸入に始まる麦作離れによって，裏作との間作は姿を消した。近年，伊勢芋栽培地帯は，稲または伊勢芋のいずれかを栽培する単作地帯となっている。

畝の高さは，わが国の畑作中では最も高く，耕盤から土盛りをするので高い場合は70～80cmに達し，一般的には50～60cmである。畝幅も広く，麦と間作していたころは1m50cmに達していた。近年では1m程度である。なぜ高畝栽培をするのか，その理由は不明であるが，この栽培法によってほぼ完全に湿害を回避してきたことは確実である。湿害の著しい水田転作作物の栽培法として，伊勢芋の高畝栽培法が教えるところ大であるといえよう。

(2)種いもの選択と予措

伊勢芋は1株から1個のいもを収穫するように栽培される。種いもが約80gで収穫時のいも重が350～400g程度になるだけで，せいぜい数倍になるにすぎない。従って，栽培面積の3分の1から4分の1は種いも用に残さねばならず，種いもが高価につくのが伊勢芋の欠点である。

種いもの選定については細心の注意をはらっている。種いもは形が整い，皺襞が少なく外皮ができるだけ白いものを選定し，小形のものは丸いものまま栽植される。その大きさは75～94gを種いもの標準とし，それ以下では減収し，それより大きい種いもでも増収することはない。従って，図2に示したごとく，150～190gのものは二つ切り，220～260gのものは三つ切り，300～340gのものは四つ切りとする。

種いもの切断法は最も重要である。伊勢

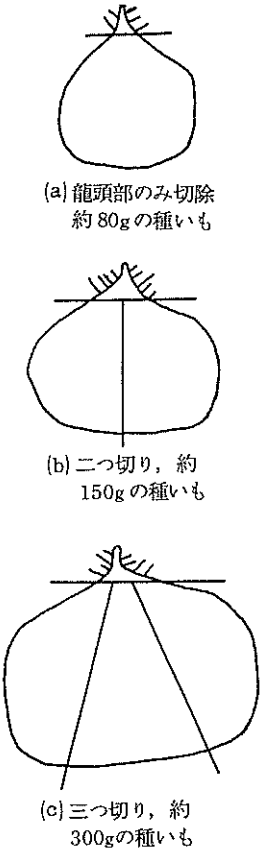

図2　種いもの切り方

芋の発芽するところは龍頭部に限られているので，龍頭部を中心として切断する。しかし，龍頭部をある程度切除しておかないと無数に萌芽するので，芽かき作業に多大の労力を要する。従って，切断に当たっては，龍頭の部分を直径1.5～3cm程度切断除去し，しかる後にこれを中心として二つ切りまたはそれ以上に切断する。切断面には必らず草木灰を塗抹し，乾燥させて栽植していたが，近年は，農薬を塗抹するようになった（図3）。

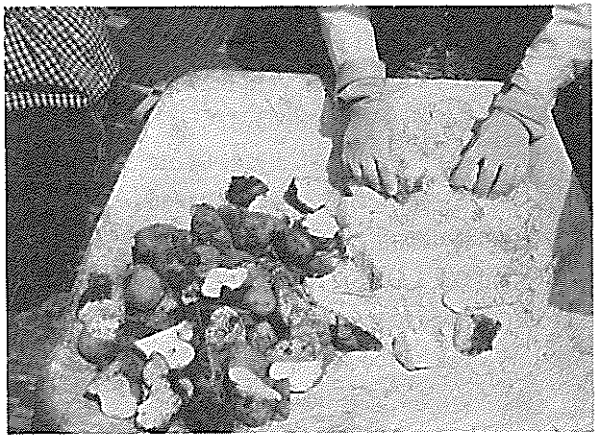

図3　種いも切断面への農薬の塗抹

種いもには，このように丸いもと切りいもがあるが，古くから丸いもの方が優れているといわれている。丸いもは発芽が安全で，新芽の形成が早く，収量も多い。一方，切りいもは，切断法を誤まれば発芽することなく，土が湿りすぎると腐敗しやすい等の欠点がある。切りいもはそのまま直ちに栽植して差し支えないが，植付け時に土が湿りすぎる場合，あるいは腐敗なく発芽を揃えるためには，3日間室内に切口を上にして蔭干しして，切口が黄変して表面に皮を形成させてから栽植すれば安全である。

(3)種いもの栽植と栽培管理

種いもの植え方にも細心の注意がはらわれる。切り口を斜めにして干湿に耐えるように植えるのがもっともよいとされてきた（図4）。約30cmおきに手で浅い穴を作り，1塊りずつ切り口を北向きにして植える。植付けの深さは，いもの上1～2寸程度の覆土の浅植えで，これより深いと蔓の出るのが遅れ生育も良くない。覆土の後は土の硬化を防止するため，籾殻または腐熟堆肥で覆い，植付後の敷草と追肥以外は本圃内に絶対に立入らないとされてきた。いか

なる作業においても畝内に足を踏み入れることはさけられてきた。

定植後の管理は，除蘖作業がいもの肥大にとってきわめて重要である。1個の種いもから2本以上の芽を出す場合は，強壮にして太い蔓1本を残して他のものは全部除去する。蔓の数といもの数とは同数なので，大きい品質の良いいもを生産するには1株1蔓とし，いも1個とすることが肝要である。除蘖作業は6月上中旬に行われる。中耕の後，耕地一面に麦稈を敷きつめる。これは土壌の乾燥と凝結を防ぐためである。

その後，蔓の伸長につれて蔓分けを行う。これは，蔓が互いに巻きつき，団子状になるのをさけ，均等に麦稈上に配置し，空気の流通と日光の透射を十分ならしめるために行われる。この作業は3～4回行うが，多くの労力を要するとともに，蔓が折れやすいために蔓の生長に悪影響を及ぼすことから，50cm程度の支柱栽培が近年多くなっている（図5）。しかしながら支柱栽培による増収や品質の向上はなく，むしろ減収の傾向にある。

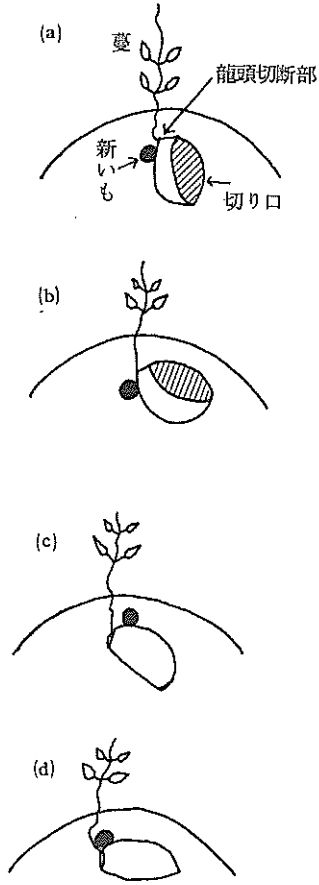

図4　伊勢芋の栽植法
(a)よい栽植，切り口を溝の外方にやや傾斜させ，頭部を側方に向ける。(b)よい栽植。(c)悪い栽植。(d)最も悪い栽植。

夏に旱天続きで乾燥する場合は，灌水が重要である。とくに8月中下旬のいもの肥大最盛期には灌水の効果が大きい。乾燥が続くと色沢が悪く，外皮が硬化して品質が低下する。灌水は土壌温度が下がった夜間に畝間掛け流しとし，早目に排水するのがよい。昼間の灌水は最も悪く，品質の低下を招く。

収穫の適期は10月下旬で，蔓の枯死した後に行う。早いものでは9月下旬

図5　伊勢芋の支柱栽培
麦作がなくなり敷きわらには稲わらが用いられている。

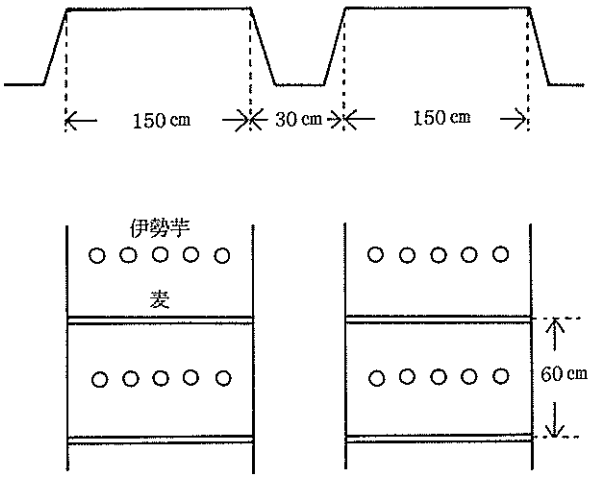

図6　麦と伊勢芋の間作様式
麦畦のなかに5株を栽植する。

から掘り始めるものもある。

(4)麦作（裏作）と伊勢芋栽培

かつては水田，畑ともに麦と伊勢芋との二毛作が行われた。畑では畝幅60～76㎝に栽培し，その畝間を耕した後間作した。また田畑輪換の乾田では，水稲刈取り後，牛耕または鍬で180㎝の畝幅，30㎝の溝をこしらえ，麦を60㎝間隔で栽培し，麦立毛中に麦畦の間をよく耕して同じく間作した（図6）。種いもの植付け前に充分に麦の条間を耕し，土塊を砕き，発芽をよくするように注意がはらわれた。種いもの植付け時期は麦の生長と作業のバランスで決められており，麦刈りのころに伊勢芋の蔓が30㎝程度に伸びるのを目安とした。大麦，裸麦ともに6月中旬の刈取りであれば5月初め（八十八夜），6月初旬の刈取りであれば4月下旬ころが植え付けの適期であった。

3.伊勢芋の栽培適地

伊勢芋の産地は，比較的狭い範囲に限定されている。多気町は櫛田川沿岸の沖積層で，砂質壌土のなだらかな傾斜地であり，山林と川の中間が特産地となっている。山林のふもとに溜池があり，この池の水が古くから水田と伊勢芋栽培に用いられてきた。この地は昔から小作料が高く，三重県下では最高で農業生産性の高い地域でもあった。

伊勢芋栽培と気象との関係をみると，生育期間中乾燥が著しいときは発育が悪く，色沢もよくないといわれている。また，雨が多いときも品質が不良で形も悪く，貯蔵中に腐敗しやすい。植え付け時に適当な降雨があり，夏季になって降雨の少ない天候が最も適している。土質としては，肥沃な砂質壌土，または壌土が適している。連作地でないことは言を待たない。

4.伊勢芋の利用

前述したごとく，伊勢芋は高価であるが，近年，市内のスーパーでも販売されるようになった。伊勢芋は粘性が高く，酸化されにくいので，すりおろしておいても2～3時間は純白さを維持できる。新いもが親いもをかつぐようにしてつくところから「親孝行芋」とも呼ばれ，近年，贈答品としての需要が高まっているといわれる。また，いもの純白さのゆえに，結婚，縁組み等の祝いの献立てにも伊勢芋料理が調えられることが多い。カルカンまんじゅう，薯蕷まんじゅう，なやばしまんじゅう等の菓子原料，あるいはカマボコやハンペン等の練り物やソバ等の麺類にも利用されている。

引用文献

川上　幸治郎

1968　『ヤマノイモ百科』富民協会。

野口　弥吉（監修）

1977　『農学大事典』養賢堂。

星川　清親

1980　『新編食用作物』養賢堂。

石井　林寧・井上　頴数（編集代表）

1970　『最新園芸大事典』誠文堂新光社。